

## 会いたい

私は今年赤ちゃんを授かった。とつてもかわいい女の子。元気で大きく育ってほしい。もうすぐ、ハイハイをして、「ママ」って言うてくれる。そして、学校に入つて、やがて就職して、私もいつかおばあちゃんになるのか。かわいいわが子。

抱っこしながら、なにげなく見ていたテレビのニュース番組が、拉致問題のことをとりあげていた。娘さんの救出を訴えるご両親の様子が映し出されていた。

「お年をとられたなあ。」

そんなことを思いながら、中学校三年生だった九年前のことを思い出した。



私の家は、私と母、弟の健治の三人家族。学校から帰ってきて、いつものように、おやつを食べながら母と今日の学校での出来事を話していた。テレビでは夕方のニュース番組が流れていた。母がふとつぶやいた。

「中学校一年生か。今のあなたと同じ年頃やったんやね。怖かったやろうな。もし、あなたが突然この家からいなくなったら…。あなたが

いなくなったこの食卓で、健治と二人で、どんな話をしながら、何を思いながらご飯を食べるのかなあ…。」  
ニュースは拉致問題についてだった。

ある日の社会科の時間、「最近のニュースについて」の発表の時に、拉致問題について発表する友だちがいた。

「日本人が拉致されている疑いがある。それに対して二年前に日本の首相が訪朝して会談を行い、拉致被害者五名が帰国した。そして今年の五月に首相が二度目の訪朝をして、残りの拉致被害者の帰国について交渉を続けている。」といった内容の発表だった。中学校一年生の女の子が、学校の下校途中に拉致された様子などの話を聞きながら、「何てひどいことをするんだ。」  
と思った。

その日、部活動が終わっておしゃべりをしていた時に、小さな頃から仲がよいユミがふと話しかけてきた。  
「あんな。ちょっと聞いてもいい？  
拉致問題のこと、どう思う？」

「なんか怖いし、信じられへんな。」  
と言ってしまい、はっとして口をつぐんだ。

「そうやんな。」  
といってユミは黙ってしまった。



ユミは、在日朝鮮人だ。そのことを、ユミは私に、小学校六年生の時に話してくれた。多くの友だちは多分知らない。ユミは今日一日ずっと気にしていたんだと思った。私は、ユミに何と言っているのか分からなかった。家に帰ってからユミのことが気になっていた。ずっと考えていた。

「明日、ユミに話をしよう。」

あれから、九年。いまだに解決しない問題だ。娘の救出を訴えるご家族も、年をとられた。それだけの年月が流れたということだ。そしてその期間ずっと、再会できる日を願っていられたんだ。

横田めぐみさんのお母さんのこんなメッセージがある。

なかなか助けてあげられず、三十四年も経ってしまったけれども、あなたが残していった「ベルサイユのばら」の本とか、あなたが大事にしていた小さな学用品とか、めぐみちゃんが着ていた五・六年生のころのお洋服とか、全ての物を全部大きな箱二つにきちんと入れて今も残してありますよ。あなたが寝る時にかけていたピンクのタオルケットもまだそのまんまお洗濯して置いてありますよ。時々お母さんはそれをかけて寝ることがあります。めぐみちゃんの何か給食のような匂いがしてくるような、何か悲しいような、嬉しいような気持ちでそれをかけて寝ることがあります。

自分に娘が生まれた今、横田さんのお母さんの気持ち、以前よりも深く感じることが出来る。家族にとっては、「忘れたり」、「あきらめたり」できる問題ではない。そして、拉致されて、帰国がかなわない方々の気持ちは、さぞかし無念であると思う。年老いていくご両親のことを心配されているはずだ。自分の親が悲しんでいる姿を想像することは、さらに大きな悲しみとなる。

長い人生にはどんなことが起こるかわからない。いろいろな問題で、大きな悲しみや不安に耐えながら過ごす人が、世の中にはたくさんいる。その立場になってみないと分からないことがあるだろうし、不安や悲しみをすべて取り除くことはできない。しかし、その苦しみが少しでも軽くなるように、そして明日に希望をもって生活をしてもらえるように、私にできること、私がしなければならぬことがあるはずだ。